



からの激しい弾圧にさらされながらも、近代民主主義社会に導いた啓蒙思想の歴史を記したものである。

☆『社会契約論』ルソー／著 平岡昇・根岸国孝／訳 角川書店 1965年

もっとも過激な人民主権論を説いた書である。「国家は個人どうしが互いに結合して、自由と平等を最大限に確保するために契約することによって成立する」と説き、今までの国家観をくつがえし、革命的な民主主義の思想を示した。フランス革命に影響をあたえ、近代民主主義社会の道を開いた書。

☆『ローズ・ベルタン ～マリー・アントワネットのモード大臣～』
ミシェル・サボリ／著 北浦春香／訳 白水社 2012年

18世紀ヨーロッパのファッションを牽引したモード商、ローズ・ベルタンは、パリの高級店で修業したのち、自分の店「オ・グラン・モゴル」を開く。質素で野暮ったかったマリー・アントワネットは、ベルタンと出会い、彼女が創り出す美しい衣装、斬新なアイデアに心を奪われていく。彼女は自らのセンス自体を商品と考えた初めての人物であり、オートクチュールの礎となった。ファッションデザイナーの祖。ベルタンの波乱の生涯を同時代の史料から辿る。

☆『一五〇通の最後の手紙 ～フランス革命の断頭台から～』
オリヴィエ・ブラン／著 小宮正弘／訳 朝日新聞社 1989年

有名なマリー・アントワネットほか、無名な市民たちまで。処刑前夜、囚人たちは夫や妻、子どもたち、親友にあててさまざまな切実な思いを筆に託した。150通の手紙を通して知る、革命のもう一つの側面を映し出します。

2019年12月発行
与野図書館 さいたま市中央区下落合5-11-11TEL 853-7816 FAX 857-1946

現在、世界中で近代の民主主義が問われています。

その近代の民主主義の先駆けとなったフランス革命とは、どのような理由で始まり、どのような道をたどり、『自由・平等・友愛』の近代社会の成立に至ったのでしょうか。いま一度考えていただく本を紹介します。

☆『物語フランス革命 ～バスチーユ陥落からナポレオン戴冠まで～』
安達正勝／著 中央公論新社 2008年

1789年、市民によるバスチーユ襲撃によって始まったフランス革命は、希望とともに始まり、やがて恐怖政治へと突入、ナポレオンが登場し、彼の皇帝即位で終わります。本書は、ドラマチックに当時の人達や社会の雰囲気を描き出します。

☆『専制君主と啓蒙思想家 ～十八世紀のフランス～』
西嶋幸右／著 教育社 1980年

フランスの啓蒙思想とは、第三身分、なかでも新興ブルジョワジーを基盤とする思想家たちが自ら人間社会の代表として自覚をもち、理性と啓蒙の名のもとに自らの要求と期待とを思想的に体系したものである。

やがて、専制君主制だったヨーロッパの特にフランスで、市民革命の機運が高まると、これらの啓蒙思想が原理となり、紆余曲折があったが、近代民主主義社会が誕生する。本書は、十八世紀のフランスで、旧支配階級（君主・貴族・宗教家）